

通勤・通学におけるモーダルチョイスに関する研究

徳島大学工学部 正員 定井 喜明
徳島県土木部 正員 ○重本 誠司

§1. 研究の目的

現在すでに、地方中核都市の通勤・通学時におけるマイカー通勤の激増による交通混雑は、大きな都市問題となっている。徳島市の場合も同様であり、通勤・通学時の交通混雑を解消、緩和するために、マイカー通勤を一層効率的な公共交通機関に転換さす政策を析出するため、通勤・通学時の交通手段選択実態からその特性を解析し、かつそのモデルを構築する。

§2. 調査概要

本研究の資料となったアンケート調査は「徳島地域バス路線整備委員会」が、昭和55年8月1日から10日までに行なったものである。対象地域は、徳島西部地域の徳島市国府町、名西郡石井町、麻植郡鴨島町、板野郡古野町の4町であり、調査対象者は、対象地域内常住者で、徳島市に勤務先、学校がある15才以上の者である。調査方法は、調査員が対象地域の家庭を無作為に訪問し、対象者がいることを確認した上でアンケートを手渡し、後日回収した。アンケート配布数は、昭和50年の国勢調査結果を用いて各対象地域から徳島市への通勤・通学流入率を求め、これと昭和55年6月末現在の人口数から算出した徳島市への通勤・通学者数によって比例配分した。アンケート配布数は1550票、有効回収数は1420票（有効回収率91.6%）であった。

§3. 通勤・通学のモーダルチョイス特性

図-1から、マイカー通勤者がいかに多いかがわがり、またバスは、通勤・通学に余り利用されていないことがわかる。徳島西部地域から徳島市への通勤手段は、主として国鉄とマイカーである。また、国鉄とバス通勤者を合わせた公共交通機関通勤者は、マイカー通勤者よりも少ない。

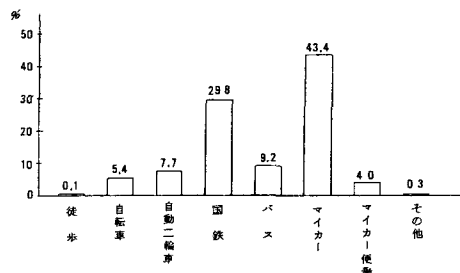


図-1 通勤通学交通手段の分布

次に図-2に示すように、バス停と自宅との距離が、100m未満と極めて近い地域では、バス通勤者も

20%近く占めるが、それから遠くなるに従って少なくなっているが大きい減少はない。またバス停と自宅との距離に関係なく、マイカー通勤者は多く、バス停に近い地域の通勤者は、国鉄に乗るよりバスに乗ることがわかる。

また図-3に示すように、国鉄駅から700m未満に自宅がある者は、一番多く国鉄を利用している。700m以上になるとバス通勤者はあまり増えないが、マイカー通勤者は著増している。自宅から国鉄駅までの距離は通勤交通手段選択に相当関係があると考えられる。数量化理論Ⅱ類により、

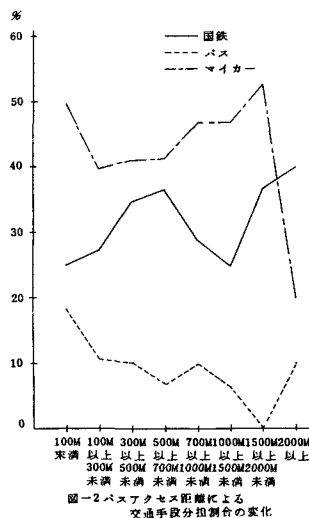


図-2 バスアタセ距離による交通手段分担割合の変化

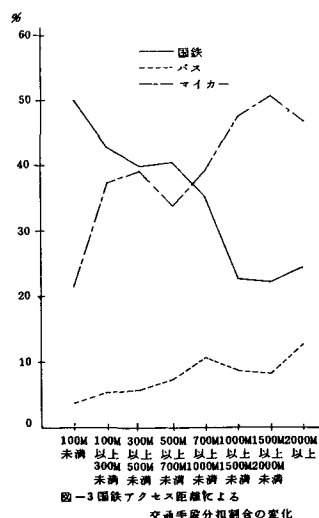


図-3 国鉄アタセ距離による交通手段分担割合の変化

